

# 特別寄稿

## 愛宕中学校の閉校に寄せて



第12代校長 平沢 大吉郎

閉校記念誌への寄稿となると意氣消沈になるのは自然の理と言ってもいいのだろうか。

愛宕中学校が開校したのは昭和36年。私が中学校に入学したのは竜ヶ崎中学校だった。昭和29年4月だった。すると、私が卒業してからのことになる。私が愛宕中学校に奉職したのは平成11年4月から平成14年の3月末日までの3年間だった。校長室には歴代の校長の写真が掲額されていて、私としては、常に感無量の気持ちを抱いていた。常に尊敬の念を持つつ、校長先生方や当時のご指導に思いをはせて、頭を垂れていたのであった。そして、歴代の校長先生方を徳川幕府の將軍になぞらえて見比べていたものだった。幕府最後の將軍はこの人の時だったなどと、一人で悦に入っていた。授業中に教わった先生は、福田廣志先生、栗山友治先生等がいた。栗山友治先生は私より10歳上のピカピカの一年生教師で100メートル走の県記録保持者で、その韌駄天走りには驚嘆させられた。今でも時々山さんの所へは、教えを乞うために伺っている。

福田廣志先生は、威厳のあった人で、全校朝会があつたりすると、生徒たちがザワザワしながら整列するので、中々整列できないでいるとき、朝礼台に福田先生が登壇すると、シーンと水を打ったように静かになり、すぐ整列完了という、目にも止まらぬ早わざを示してくれた。見た目にはこわい先生という感じであった。

愛宕中50年のあゆみという記念冊子ができていたとは夢にも知らなかつて有難く頂戴した。3年間愛宕中にいたのだったと確認をした。竜ヶ崎中学校を卒業し、愛宕中学校で教鞭を取るなど、幸せいっぱいの教員生活であったなどと振り返る日々だ。

## 素晴らしい生徒会活動



第14代校長 宮本 弘

私の「こころのふるさと」愛宕中。

この思い出多い創立61年の、輝かしい歴史と伝統を持ち、緑の丘に立つ学び舎が今、静かに幕を下ろそうとしている。

私は、本校に3度勤務させていただいた。昭和48年度から14年間、平成4年度からは3年間、そして平成17年度からの2年間の計19年間である。19年といえば、私の教員人生の2分の1超である。の中でも、生徒たちと4つに組んで喜怒哀樂を共にした学級担任時代の14年間が、特に心に残っている。

愛宕中の生徒会は、5つの願い=目指す生徒像（深く考え正しく判断する生徒、心の温かい思いやりのある生徒、他）の具現化に向けて、校内・校外の活動を充実させるべく、地道な活動を展開してきた。

### ○体育祭（学級対抗から団対抗へ）

この形式は、昭和55年度より採用された。昭和48年度944名の生徒数が年々増え、55年度には1114名までになり（学区内は6小学校）、さらに増加が見込まれた。そこで、クラスの和（輪）を大切にしつつ、より広く強い人間関係づくりの必要性が求められ、承認された。

団名は、誠実、自主、協力、責任の4団である。団長会議は何度も実施され、団長を中心に各団一丸となって応援や団種目の練習に励んだ。年ごとにかなり盛り上がった。

### ○ベルマーク運動

収集と点数数えは非常に根気のいる仕事であった。0.1点のマークはピンセットを使用した。旧愛宕中管理棟西側の噴水池の傍にあった「大時計」は、なんと10万点だった。生徒や家庭、地域の方々等の善意の結晶である。

### ○歳末助け合い運動

本校の伝統行事の一つ「歳末助け合い運動」の一環としての「病院等訪問」。募金の一部でシクラメンを購入し、市内の病院や老人介護施設へ届け、入居者と触れ合った。帰り際に大粒の涙を流して手を握る入居者と生徒たちとの心の交流場面が印象的だった。

### ○「水害体験記」の刊行—小貝川決壊「天災は忘れたころに・・・」（昭和56・8・24）

昭和56年8月の台風15号の影響により、24日前2時ころ、高須橋上流200m地点で小貝川が決壊した。被災した学区内生徒は318名で、全校生徒（1188名）の約4分の1超の大災害であった。この被災体験を風化させないために、本部役員や3年生有志が中心となり、約6か月かけて完成了。

以上、生徒会活動の素晴らしい端を記してきたが、改めて本校に勤務できたことに感謝しています。

## 愛宕中学校 閉校に寄せて



第15代校長 藤後 茂男

令和という新しい時代になり3年。時代の流れとはいえ、愛宕中学校が長い歴史に幕を閉じることには惜別の念を禁じえません。愛宕中は地域の方々の期待と熱意により昭和36年創立、それ以来、多くの有為な人材を育て今日に至っております。私にとっては2度勤務し、教員として最後の2年間を過ごした学校、本市教育委員会で関わさせていただいた学校であり感慨深いものがあります。

平成7~9年度当時を思い出しますと、体育館・プール・弓道場の建設、運動場の改修・階段昇降機の取付と、学校から工事の音が途絶えることがありませんでした。卒業式、入学式は文化会館で行い、部活動は活動場所を皆で探しながら工夫と努力で乗り越えました。生徒はこのような悪条件も何のその、明るく、生き生きと学び、活動していた姿。それを熱心に支え、指導している先生方に救われる思いがしたものでした。

その後、10年ぶりに勤務することになりましたが、素直で何事にも精一杯努力する生徒、熱心に支援・指導する先生方や職員、それを温かく支えて下さる保護者の方々と何ら変わりはなく、これこそが愛宕中の校風・伝統なのだと改めて実感しただいでした。

平成19年度、愛宕中にとって新たに始まったことがありました。1つは、生徒自らがよりよい学校づくり、よりよい人間関係づくりをしようと、桜井優衣生徒会長の発案のもと、「いじめ・いたずら・嫌がらせ」を撲滅しようとする活動(リーフリボンキャンペーン)に生徒会が取り組み始めたことです。胸に緑のリボンをつけ自分のいじめ撲滅の意思を表していこうとするもので、校内だけでなく学区内の小学校へも広められました。2つ目は、生徒が目標に向かい努力し、それを達成することを経験させるため、古山久文学年主任はじめ2年の先生方の発案を生かし、「歩く会」を実施したことです。先生方は事前に松見公園から愛宕中まで歩く。当日生徒と共に歩く。そして、当日参加できなかった生徒と後日また歩く。生徒を想い、20数キロ3度も歩くという熱意溢れる先生方と一緒に仕事をできたことをとても幸せに思いました。

このような思い出の一一杯詰まった愛宕中は閉校となります、この学校に関わった一人一人の心の中に永く生き続けるものと信じています。そして、新しい学校が愛宕中同様、地域の人に愛され、信頼される学校になることを願い、愛宕中学校に「今までありがとう」と感謝し、閉校に寄せる言葉といたします。

## 閉校に寄せて一生徒達との忘れ得ぬ日々



第18代校長 根本 勇一

令和3年度末に、市内の伝統ある二つの中学校が統合することで、愛宕中学校が閉校されることになりました。私にとって愛宕中は、37年間の教員人生最後の勤務校ということもあり、感慨深いものがあります。当時を振り返ると、様々な出来事が蘇ってきます。

私の一日は坂の下で、登校する生徒に「おはよう」の声を掛ける事から始まりました。その際のちょっとした雑談も楽しいものでした。週の初めには、そのまま愛宕神社に参るのも2年間の習慣でした。また、授業中に教室を訪問し学習の様子を眺めたり、放課後の活気ある部活動を見に校内を回ることも日課の一つでした。その他にも「歩く会」や私も加わっての定期テスト前の放課後学習会等、私にとっては、生徒達の活動に触れながら共に過ごせたことが最高の思い出であり誇りでもあります。純朴、純直という言葉がふさわしい生徒達、それが愛宕中生徒であると感じています。

ところで、生来、日本人は人前で議論を闘わせたり主張し合うことが苦手といわれています。これからを生きる若者には、是非、自分自身について自身の言葉で語ること、自分の思いや考えを述べることのできる力を身に付けて欲しいと思います。そのためには、語るだけの知識や情報が必要になってきます。そこで、私は本を読むことをお勧めします。様々な分野から、先人や今を生きる人たちの智を吸収し糧としてほしいと願っています。

愛宕中学校という校名は表舞台から消えてはしまいますが、ここで共に学び共に過ごした思い出は消えることはありません。学舎は残り後輩達が引き継いで新しい歴史を作っていくことになります。

最後に、愛宕中学校への惜別の思いと共に、新制中学校の新たな歩みに対して、さらなる充実、発展を祈念し筆を納めます。

# 特別寄稿

## 閉校に寄せて

第19代 P T A 会長

藤田 信夫

会長に就任した昭和 60 年度は、私の年齢も、子どもの親として働き盛りで、大変忙しい時期でしたので、仕事と P T A 活動を両立させるのに苦労した事を覚えています。

この年は、愛宕中学校が、一部城西中学校に分離した年でもありました。それでも愛宕中の生徒数は、県内でも 5 番以内に入るマンモス校でした。

また、市内には愛宕中学校の他、本校から分離した城西中学校と城南中学校の三つの中学校がありました。

当時の校長先生は、助川校長先生で、校長先生とは、八原小学校で、校長と P T A 会長の間柄でしたので、気心が分かっていました。

ちょうどその頃、学校に隣接して、文化会館が建設され、学校行事に活用されましたので、生徒たちも大変勉強になったことと思います。

のびのびと学生生活を送って、進学や就職或いは自営業と、進む途はそれぞれでも、愛宕中を、素晴らしい中学校として、立派に卒業していったことを思い出します。

## 当時の思い出

第33代 P T A 会長

植竹 勇

第33代 P T A 会長の植竹です。懐かしい思い出に浸りながら当時の様子を振り返ります。

私が P T A 会長を務めさせていただきました平成 16 年度は、3 学年を中心に生徒による問題行動が多くみられました。授業妨害・携帯電話の使用・喫煙・服装の乱れ、そして様々な事件がきました。個々の家庭でのしつけ問題、学校の集団生活でのストレス、先生方の指導方法など、色々考えられました。P T A 役員と先生方と何度も対応策を練りましたが、良い案が見つかりませんでした。龍ヶ崎西小学校から常陸大宮市立常陸大宮中学校に転任されました、上久保洋一校長先生（後に常陸大宮市教育長）にアドバイスを頂き、平成 17 年 4 月より保護者全員参加の安全点検訪問（ふれあい訪問）を実施しました。1 班 7 ~ 8 人で編成し、学校のありのままの姿を見ることや、先生方との情報交換を行うことを目的としていました。1 年間実施すると、大きな問題もなくなった記憶があります。

親子 2 代に渡りお世話になった愛宕中学校が、61 年の歴史に幕を下ろし、新『龍ヶ崎中学校』として、新たな歴史を作り上げて行くことを期待しております。

## 創立 50 周年を顧みて憶う

第36代 P T A 会長

小更 修

私が創立 50 周年に実行委員をやらせて頂いたその時は、この先何十年、何百年と永遠に続くであろう愛宕中学校の歴史の 1 ページとして、特に 50 周年という節目は特別であるという想いがありました。実行委員会立ち上げ、式典事業と記念誌事業の成功に向けて会議と準備を重ねて、体育祭の時にはバザーを催したり、諸先輩のお力をお願いしたりと多くの方に支えられ進めていきました。式典が近づく頃には夜遅くまで、日曜日には一日中準備に取りかかり、そして記念誌が出来上がり、式典も無事に迎えられました。50 周年に携わったことによって、改めて愛宕中学校の長い歴史を知ると共に素晴らしい伝統の重みを感じましたが、閉校によって終止符が打たれとても寂しく思います。しかし、新しく生まれ変わる龍ヶ崎中学校の素晴らしい未来への船出を祝う共に、生徒たちが充実した学校生活を送り、笑顔あふれる学び舎になるようご祈念申し上げます。

## 愛宕中閉校に寄せて

第37代 P T A 会長

櫻井 直之

1973 年 4 月、私は黒の詰襟に身を包み緊張しつつ愛宕の坂を登りました。その日は 4 月というのに冷たい雨の混じった寒い日でした。そんな入学式だったのを覚えています。

時が流れ 2010 年、愛宕中創立 50 年の記念の年に、P T A 会長を務めることとなりました。校舎はすっかり建て替わり当時の面影はなく、生徒の笑顔を見ていると、昔よりかなりアカ抜けた感じ、そして礼儀正しく映りました。

私達のおおきな仕事は創立 50 周年の記念誌の発行でした。パソコン操作もおぼつかない会長のもとながら、役員の皆様、とりわけ当時の教頭鈴木先生のご尽力でなんとか発行にこぎつけた事は、今、とても良い思い出となっております。役員の皆様本当にありがとうございました。

そして本年、愛宕中はその 60 余年の歴史を閉じ、来年度新生龍ヶ崎中学校となります。時移り、名は変われど、歴史の丘でこれからも学ぶ生徒たちの学校生活、未来に心よりエールを送り、ペンを置きます。

## 愛宕中の思い出

昭和47年度卒業

飯田 俊明

私が愛宕中学校に入学したのは、大阪万博が開催された昭和45年（1970年）でした。

陳腐な言い方をすれば、少年から大人への階段を登り始めた多感な青春時代でした。愛宕の愛の字にきらめきと誇りを感じながら、初めて学んだ英語や体育祭、修学旅行、部活で流した汗と涙、淡い恋心など様々な思い出が蘇ります。とりわけ記憶に残っているのが、2年担任のI先生が教室に掲げた武者小路実篤の「人知るもよし 人知らざるもよし 我は咲くなり」の言葉です。

愛宕神社を囲む様に植樹されたアジサイの花が梅雨時の雨に濡れながらひっそりと咲き誇る姿と共に、この言葉が自分を勇気づけてくれ、人間的に成長させてくれた気がします。

愛宕の名が消えてしまいますが、一抹の寂しさを禁じ得ませんが、愛宕の歴史・精神を踏襲しながら時代に即応した新中学校として、多くの素晴らしい生徒が巣立っていくことを願っています。ありがとうございます愛宕中学校。

## わが母校、愛宕中学校

昭和50年度卒業

秋山 利夫

高台にそびえる白亜の校舎。南側の急勾配階段または東西の坂道を往来し、愛宕中生はこの学び舎に通っていました。

当時から愛宕神社周辺の斜面には、故吉田征美先生が整備されたとされる見事な紫陽花群がありました。数学は後に龍ヶ崎市教育長となられた故千代倉邦彦先生に教わりました。たくさんの偉大なる先生方にお世話になり、今でも感謝の思いで一杯です。

同級生が50歳を超えた頃から集まるようになりました。当時は1学年8学級もある大所帯でした。しかし、愛宕中でともに青春時代を過ごした仲間達は一瞬で一体感を再生し、当時にタイムスリップしてしまいます。

城南中学校と統合し龍ヶ崎中学校として新たな歴史をスタートすることを喜ばしく思います。それでも歴史は残ります。わが母校はこれからも愛宕中学校です。

## 母校「愛宕中」に感謝

昭和54年度卒業

内田 昌美

時代の流れの中で覚悟していたこととはいえ、母校「愛宕中」とのお別れに淋しさを感じます。自分が在校中のことは、40数年前のことながら今でも思い出します。頭髪は丸坊主、体育着は白色ランニングシャツ、白色短パン、胸には「A」の一文字。今思うと、とてもシンプルでかっこよかったと思えます。そして、陸上競技部員として放課後のグラウンドを真っ暗になるまで思い切り元気に走ったこと。ひとりではできないことも仲間とやればできる、そんな勇気をあたえてくれた中学校生活でした。

高校の体育教師になってからも、多くの愛宕中卒業生、自分の後輩たちに出会うことができ、卒業後もずっと愛宕中と繋がっていたように感じます。

多くの思い出や勇気をくれた愛宕中の卒業生であることを幸せに、そして誇りに感じています。私の心には永遠に残る学校です。我が母校「愛宕中」に感謝。ありがとうございました。

## 思い出のキーワード

昭和59年度卒業

大橋 靖司

1982年、愛宕中に入学した1年生は453人（多分）11クラス（1クラス40人程）。男子は坊主で紺ジャージ・女子はショート・長い髪は束ね赤ジャージ。制服は今も変わらぬ学ラン・セーラー服。靴は白、上履きは先端が青。通学は佐貫・八原・北文間は自転車、旧市内の子は徒歩。通学かばんは頭陀袋（ずだぶくろ）。1年生の7～11組は、プレハブ校舎。なぜか1年女子は先輩女子なら誰にでもいいさつ。本校舎はペランダが廊下、大雨の日はびしょ濡れ。2年生になると長山中と分離。3年生になり今度は城西中と分離。当時の校歌は「緑の丘」。英語の教科書の登場人物はタロウとハナコ。体育の授業で県民体操。外部テストは新教研。学校対抗陸上競技会。体育祭は、自主（白）・協力（青）・責任（赤）・誠実（黄）団、団ごとの大きなパネルは印象的。生徒会長は前期と後期で2名。文化会館がある場所は、昔は池？沼？。愛宕山の広場にアジサイ、裏山にアケビがたくさん。吉田先生筆頭に怖い先生数人など、あの頃を思い出すきっかけになれば幸いです。

# 特別寄稿

## 愛宕中学校閉校に寄せて

平成4年度卒業

宮本 誠之

私が愛宕中学校に通っていたのは、確か1989年度～1992年度頃かと思います。自身の姉兄も卒業生、父も創立第1回卒業とのことで、家族や地域の友人、皆がお世話になった場所でした。

入学当初はプレハブ、その後竣工した新校舎。

快適な校舎での中学校生活で、私は【何のために、誰のために、何故?】を考えながら生きる大きなきっかけを得ました。

それは2年生の立志式。実は私は入学した時からずっと丸刈り強制の決まりに時代錯誤を感じていたので、立志の思いでそのことを述べ、そのままの勢いで生徒会長として生徒心得の改訂に関わらせていただきました。

私の拙い議事進行を支えてくれたのは、当時、クラスの担任、テニス部の顧問、生徒会の顧問、ついでにパズルクラブの顧問と、恩師 内野正美先生には何から何まで面倒見ていただき、本当にお世話になりました。

たとえ閉校しても、語り尽くせぬ学び舎での思いは消えません。ありがとうございます、愛宕中学校。

## 当時の思い出

平成13年度卒業

柳 純子

(旧姓 塚本)

私の愛宕中での思い出と言えば、やはり部活と体育祭、生徒会活動でしょうか。中学で入った部活は今はなき「演劇部」。当時、新生歓迎会で演劇部は体育館で短い演劇を披露してくれました。1年生の私は、体育館が劇場かのように感じさせるような躍動するその姿に大変感動しました。目立つのが好きだった私は吸い込まれるように入部し、歓迎会や施設での公演などに励みました。

当時は「先輩」というのが光り輝いていて、誰もが自分の「推しの先輩」がいる。そんな時代だったと思います。

私が生徒会長に立候補したときは女子四つ巴の戦いで、それも今思うとすごいなと感じるのですが、そこも先輩の影響は大きく、憧れの先輩の後に続きたいという女子も少なからずいたことは確かです。体育祭の応援団もそう、合唱祭の歌う曲もそう、憧れの先輩の背中を追いつつ、自分たちの背中を見てほしい!そんな熱い情熱があった年代でした。

これを踏まえ、「全員主役」、この言葉が愛宕中にはぴったりではないかと感じています。こうして文章を書くと今も鮮明に当時を思い出し、楽しかった日々を愛おしく思います。こうして記念誌に携われましたこと、大変光栄に思うと同時に、新しい中学校になっても、この中学校で良かったと心から思える学生生活を送ってほしいと思います。先生方、生徒皆さんの益々のご活躍を心から願っています。

## 閉校によせて

平成29年度卒業

大橋 佳汰

以前から愛宕中が閉校になることは知っていましたが、やはり自分の母校がなくなってしまうのは寂しく感じます。

振り返れば数々の思い出がありますが、中でも所属していた野球部での思い出は忘れられません。入部当初は右も左も分からず何とか練習についていくのに死んだことを覚えています。2年生になると試合でも徐々に結果を残せるようになり、より一層練習に打ち込むようになりました。むかえた自分たちの代ではこれまでの先輩方のようにチームをまとめ、目標に向けて練習しました。結果は報われなかつたですが仲間と共に切磋琢磨したあの日々はかけがえのない思い出です。

今年度をもって愛宕中は閉校となります、愛宕中の日々の思い出はこれからも私達の心の中にあり続けることでしょう。

ありがとうございます、愛宕中学校。

## 中学校の思い出

平成20年度卒業

室永 彩七

私の愛宕中学校での学生生活は、部活動が中心の3年間でした。バレーボール部に所属していましたが、毎日の練習は辛く、とても厳しいものでした。夏の体育館は暑さと湿気でサウナのようになります。身体に汗がまとわりつきました。冬の寒い日の練習は手が悴み、ボールもまともに打てず、あかぎれで血が滲むこともあります。そんな練習を乗り越え、目標を達成し、それに結果が伴った時の達成感や充実感は、より上を目指そうというモチベーションになりました。一方で、自分の思い通りにはいかないものでかしさや難しさもあるということを知りました。そんな時でも顧問の先生は、「練習を続け、違う視点でチームや自分を見つめ直すことが大切だ。その過程での努力や忍耐の時間は、必ず自分やチームのためになる。」と教えてくださいました。

この部活動での学びは、今の私の仕事である看護師にも通じています。看護は思い通りにいかない毎日ですが、患者さん一人一人と向き合い、さまざまな視点から勉強を続けることが、自分の看護の質を上げること、結果として患者さんのために繋がっています。

愛宕中学校での3年間を誇りに、常に目標を持って看護を続けていきたいです。

## 閉校に寄せて



平成 23 年度卒業生  
中山 雄太

『中山雄太』は、愛宕中学校での思い出や経験によって築き上げられています。現在、プロサッカー選手として日々過ごしています。小さいころからの夢であり、それが成就し、自分が好きなことをして生きていけることに喜びを感じています。そこに至るまでには数え切ることのできない多くの方々の支えや声援を感じ、多くの経験をすることができました。私の中で愛宕中学校での色濃く残る思い出は合唱祭での指揮者・体育祭での団長・学級学年委員長を 3 年生時に担わせて頂けたことです。当時は、その負担に迷いや不安を感じ逃げ出しそうな時もありましたが、担任の先生や友人の支えでやり遂げる事ができました。この経験から、先の分からないものに対しての挑戦する事の重要性、成し遂げた時の達成感、その過程で得ることの出来た経験値は、私の中で生き続けています。物事を何か始める時や挑戦する時、自分の中で限界を設定してしまい、多くのものを得られる機会を自ら逃してしまった自分を変えられたと思います。年を重ねるごとに知識も増え、新しいことへの挑戦を躊躇してしまうことも多くなりました。しかし、愛宕中学校での経験は弱気になる自分への後押しになっています。挑戦する事、新しい発見を求める事は同時に、失敗も伴います。失敗は『止まれば失敗、進めば過程』だと思っています。私の人生は失敗が多い道のりです。しかし、歩みを止めず進み続けたことで今があり、これから先もその歩みは止めずに進みます。愛宕中学校は、多くの思い出とともに人生の財産を与えてくれました。来年からは愛宕中学校という名は変わりますが、いつまでも私の中で行き続けるでしょう。愛宕中学校、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

2021. 7. 3



中山選手のオリンピックでの活躍を願って、応援フラッグを愛宕中で作り、中山選手に送りました。